

＜「方法」と「新・方法」＞講義立会記

金塚美穂

本稿は「方法」と「新・方法」に関する講義を通しての筆者の立会記である。筆者は講義を通して、過去ではなく現在進行中のムーブメントに立ち会うことができた。当初は友人に「その授業大丈夫？」などと心配され、筆者自身も方法主義を敬遠している部分があった。一方で、講義を聞いていて納得する部分も多くあった。筆者は第一回目のレポートで、方法主義は芸術における停滞期を打破するための一種の方法であり必要悪だと述べた。以前から現代芸術には好きなものを好きにつくるという自由な側面がある一方で、そのなんでもあり的風潮が負の側面をも作り出していると考えていた。そんな風潮に嫌気がさしていた筆者は講義を通して、方法主義はこの停滞期を打破するための最良の方法だと思った。「方法」のゲスト講義で当事者たちの話を聞いて、一見真面目に言っているようだが、当人達はそれを面白がってやっているのだと聞いて敬遠もなくなった。最後のほうで2回しか講義が行われなかった新・方法は方法が同語反復を説明するのに対し、それ自体で同語反復を実践するというものだった。新・方法のゲスト講義では抜き打ちテストとその解説を通して新・方法を知るという形で、何の説明もなく行われるところが新・方法的であるなど感じた。当事者たちは「方法」のメンバーよりも若く、新鋭な感じが出ていた。

「方法」と「新・方法」は作品それ自体ではあまりおもしろいものではなかった。しかし、これから先実験工房やハイレッドセンターとともに名を連ねるであろう「方法」と「新・方法」の講義に立ち会えたことは素晴らしい経験だと思う。3年間大学で受けた講義の中で一番おもしろい授業だった。